京都工芸繊維大学

	じゃん　せばすちあん　くるぜる
氏　　名	Jean-Sebastien CLUZEL
学位(専攻分野)	博　士（学術）
学位記番号	博甲第　３７０　号
学位授与の日付	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 3 項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科　機能科学専攻
学位論文題目	Cross Study:The European nation of monument applied to Japanese architecture and to History of Japanese architecture. （日本建築と日本建築史に適用されたヨーロッパにおけるモニュメントの概念）
審査委員	(主査)教授　日向　進 教授　石田潤一郎 教授　中川 理 助教授　西田雅嗣

論文内容の要旨

論文の全体は四部から構成され、日本建築の歴史記述を検討した第一部、具体的な建築物を主たる検討材料とした第二部、歴史記述・文学作品を検討した第三部、式年遷宮というモニュメントのあり方を伊勢神宮に論じた第四部から成る。これに序論と結論、その他参考資料等が付く。

19 世紀と 20 世紀初頭の日本のモニュメントに対するヨーロッパの眼差しと、日本人による日本のモニュメント観を、遺された日仏の文書資料に基づいて定義を試みる導入が置かれるが、この導入は一つの論文として独立したとしても極めて興味深い価値ある内容を持つ。日本のモニュメントに初めて接した西欧の目が、西欧のモニュメント観を日本の建造物や芸術の適応したときに、現代の我々から考えるなら多くの奇異な点が見られることを、16 世紀の文書史料も一部援用し、19 世紀と 20 世紀初頭に主にフランスで出版された日本芸術に関する書籍の検討から実証する。20 世紀に入ると、西欧のモニュメント観が日本のモニュメントには適応され得ないことを西欧が自覚し、西欧人の手になる日本芸術や日本文化の記述が変化して行く様子も同時に指摘しているのは重要である。

本論文全体の目論み、見通しをも同時に示している以上の導入を受けて、第一部として、1946 年に初版が出版されて以来現在に至るまで日本における日本建築史の一つの定本であり続けている太田博太郎著『日本建築史序説』の再読と分析、再評価を行なう。この書の綿密な再読を通じて、本論文はこの『日本建築史序説』を、建築として存在する西欧のモニュメントに比すことの出来るモニュメントであると結論する。一方で極めて正当的な建築の歴史の記述でありながら、『日本建築史序説』の至る所に、編年間形の融通性、それ以前の建築との連続性、再建の問題等、極めて独特の日本文化の歴史観に支えられた特異な視点、特異な記述があることを本論文は指摘し、この第一部において本論文は、第二部以降で具体的な建築物や文学作品、あるいは文化現象の中に検討・実証していくこととなる日本のモニュメント観の理論的モデルを『日本建築史序説』の再評価から得ることとなる。

第二部と第三部が本論文の白眉であり、伝統ある国立フランス極東学院の論文集に審査の結果掲載が決定している二編の論文の再録であるが、本論文全体の立論プロセスの中に然るべき位置を見い出している。

第二部は、平安神宮、薬師寺、延暦寺等々、多くの具体的なモニュメントの観察・分析に基づき、ひとまず日本のモニュメントを西欧の眼差しで見た場合に指摘できる特異で特殊なあり方を列記することから始まる。こうして第一部で得た日本のモニュメント観の検証が行なわれる。その中から、特に千本釈迦堂の空間構成が取り上げられ、この建築の空間が「時間」を、つまり「歴史」を空間という形で記述しており、これが太田博太郎の『日本建築史序説』の記述様式にも指摘できる日本のモニュメントのあり方の一つの大きな特質であることが論じられる。第二部においては、西欧と日本の建築モニュメント、歴史記述と建築モニュメントが絶えず比較考察され、最終的には日本建築は西欧における歴史記述と等価であり、日本の建築史記述は西欧のモニュメントと等価であることが指摘される。したがって西欧のモニュメントと日本のモニュメントを同じ土俵で考える視座として、その双方に共通して根本的概念であるところの「時間」の重要性が主張されることになる。

第三部では、具体的検討材料として今度は『日本建築史序説』以外の戦前の日本建築史や、取り分け文学作品が大きく取り上げられる。「言葉と大理石」と題された第三部第９章では、ヴィクトル・ユーゴの『ノートル＝ダム・ド・パリ』、ヴィオレ＝ル＝デュクの『大聖堂と市庁舎物語』、三島由紀夫の『金閣寺』、幸田露伴の『五重塔』などが精緻に読解され、われわれがモニュメントに求めるものは、西欧にあっても日本にあっても、「時間」や「記憶」を軸にして考えたときには、はっきりとした同質性が認められることが論じられ、検証される。モニュメントが、あるいは文学や歴史が、何を「記憶」として、残そうとするのかということへの問いかけが、グーテンベルクの印刷技術の発明以後建築は書物にモニュメントの地位を譲った」というビクトル・ユーゴの指摘を得て、日本建築の歴史記述、取り分け『日本建築史序説』の再検討へと繋がる。また三島由紀夫の『金閣寺』が極めて近代西欧的なモニュメント観を呈するのに対し、幸田露伴の『五重塔』は、西欧と日本に共通してみられるモニュメントの最も基本的な役割を見せていると位置付けるられ、この小説と『日本建築史序説』の記述様式の類似性も著者は示唆する。結局、第三部においては日本のモニュメント観の特殊性よりも、西欧のモニュメント観との同質性の検討に力点が置かれることになる。

こうした議論の行き着く当然の先として、本論文は第四部で、式年遷宮という西欧にも良く知られた伊勢神宮の建築の問題を取り上げる。エリアーデのような宗教学も一部参照して、日欧の代表的な既往の説の検討の後、本論文は、西欧における建築モニュメントの物質的存在としての比較検討には基本的に興味を示さず、ヨーロッパの研究者がこれまでに提示して来た、見えないものに対する日本の精神性、儀式としての行為の重要性、清澄なものを求める国民性などと言った、西欧人にまま見られるエキゾティズムに基づく紋切り型の伊勢論からは見事に逃れ、大嘗宮の例との比較検討などから、儀式における可視的存在性とそこにいくことが出来るという接近性の重要性をモニュメントの意味として示唆した。　　あ

最後に、以上の議論の出発点の出発点に位置する芸術における「模倣」の問題を検討する。最も西欧的な考えとしてカトルメール・ド・カンシーの定義を取り上げ、これに検討を加え、アラン・シュナップの提起するオリジナリティーと贋作の問題を加味し、極めて西欧的なパースペクティヴの中で、形の問題として日本建築における「模倣」の意味が検討され、本論文の結論とする。この結論は、本論文の議論の延長上に同様な視座から検討すべき概念、文化現象が未だ多くあることを示し、本研究の外延を示唆する。

論文審査の結果の要旨

申請論文は、比較建築論であり、比較文化研究である。オギュスタン・ベルクなどに代表される西欧の研究者の手になる日本文化論に、新たな一つを付け加えるものと評価できる。日本の伝統建築をとりあげ、これを先ずはモニュメントと捕らえて、この基本的に優れて西欧の概念であるモニュメントという眼差しが、日本の建築やモニュメントの意味をすくい取ることができるか、あるいはそうしようとしたときに日本建築は、一体如何なる問題・独自性を露呈するかを問うた論文であると言える。

マテリアライズされた物的存在のモニュメントとしての建築と、テキストとして言葉で表現されたモニュメントとしての建築史を、西欧と日本の各々について、その各々に対して日本側からと西欧側からの視点で比較すると言う、正に十字にクロスした比較検討が本論文の全体構造である。日本建築を見る日本の目、つまり日本人の日本建築観と、日本建築を見る西欧の目、つまり西欧の日本建築観をも比較するなど、従来は無視されがちであった異文化の心性の中での意味の再検討を可能にするこの構造は、大きく評価すべき本論文の特徴である。またモニュメントを、建築的な物質的なものだけと捕らえず、広く歴史記述、文学作品もモニュメンと捕らえて行なった検討には、日本建築を単なる物珍しさゆえに特別視するのでも、西欧的論理性や物質性に優位性を認めるのでも無く、こうした比較研究においては必須である対象物の十分な相対化が認められ、結果、本研究は日本建築の特殊性と同じくらいに西欧との同質性をも引き出すことに成功している。この点も大きく評価すべき点である。

以上のような比較研究を、本論文は太田博太郎の『日本建築序説』というテキストと千本釈迦堂なのどのいくつかの実際の日本建築の遺構を中心的な分析対象として、これらの具体的かつ精緻な分析を通して具体的に検討を行っており、そこから引き出された、西欧と日本のモニュメントを同じ土俵で論ずる事を可能とする「時間」という概念の重要性の指摘は出色である。関係参考文献の検討も十分であり、学術論文として評価できるものである。

日本人研究者が、西欧の建築観が近代日本において定着した否かを再検討している昨今の研究状況において、逆に西欧型の考え方に疑問を持ちつつこれを相対化して異文化を見る西欧からの本論文の眼差しは、こうした視点が日本側には欠けている今、まさに必要とされているものであって、本論文の様な研究が日本において西欧人の手によって行なわれた意義は小さくない。

本論文において、日本人の日本建築観の指標として通奏低音のように全編を通じて繰り返し参照される太田博太郎著『日本建築史序説』は、申請者が自ら全て仏文に翻訳をすると言う忍耐を要する地道な作業を経て本論文で参照されているものである。クリティック・エディションを目指した全文翻訳と言うこの努力は評価されるべきである。また論文中では随所で日本建築の実際の現存遺構の観察基づく考察が披瀝されるが、これも申請者自身が日本全国の全ての国宝建造物を実地に見て回った結果である。このような地道な研究活動の結果が本論文であり、こうした点も評価できる。